

障がい者の漁業就労チャレンジ！

合同会社志摩ふくし水産

山本和男

大屋 敏（志摩市社会福祉協議会）

1. 地域の概要

志摩市は三重県の東に位置し、5.2 万人が暮らしている（図 1）。複雑な海岸線と森林に育まれた豊かな海が広がり、漁業が盛んに営まれている。志摩市の南部には英虞湾、北東部には鳥羽市と囲む的矢湾があり、その静穏な環境を生かして青ノリやカキ、真珠などの養殖業が盛んに営まれている。弊社がカキ養殖を行う三ヶ所（さんがしょ）地区は、的矢湾の中部に位置する人口約 300 名の地区である（図 1）。

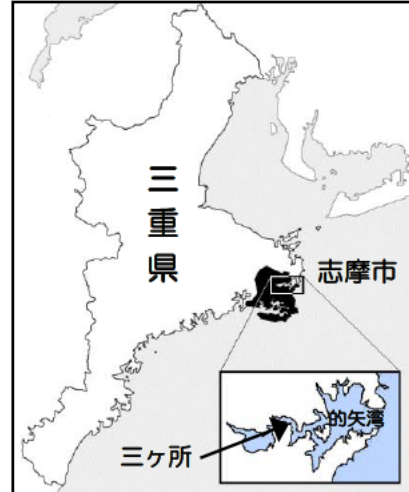


図 1. 三ヶ所地区の位置図

2. 漁業の概要

三重県は、養殖カキ類の生産量が全国 7 位（3,401t（平成 27 年漁業・養殖生産統計））である。的矢湾では、カキ養殖が盛んに営まれ、「的矢かき」（有限会社佐藤養殖場）、「的矢漁協かき・岩がき」（鳥羽磯部漁業協同組合）、「畔蛸の岩がき」（的矢湾あだこ岩がき協同組合）といったブランドカキも生産されている。鳥羽磯部漁業協同組合三ヶ所支所では、組合員 61 名のうち 50 名が、約 100 基の筏を用いて主にカキの養殖を営んでおり、弊社は平成 29 年 2 月より准組合員資格を得てカキ養殖を行っている。

3. 研究グループの組織と運営

弊社は社員 2 名の会社で、志摩市社会福祉協議会（以下、「志摩社協」という。）が取り組む「水福連携（水産業における障がい者の就労）」を支援・強化する目的で、平成 28 年 12 月に設立した。

業務として自営でカキ養殖を営むほか、漁業者から依頼された漁業に関する作業を請負っている。

弊社はこれらの業務にあたり、志摩社協に障がい者の施設外就労の場を提供し、社員が指導員として業務の管理と従事者（障がい者）への技術指導を行っている（図 2）。

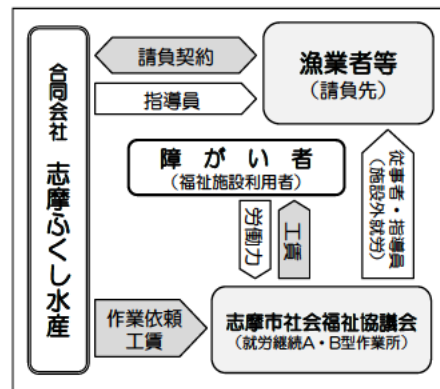


図 2. 漁業に関する作業の請負体制
表 1. 志摩市の障害者手帳所持者数
(H29 年 3 月 31 日現在)

4. 研究・実践活動の取組課題選定の動機

志摩市には約 3 千人の障害者手帳所持者がいる（表 1）。この内、就労年齢（18～65 歳）に当たる人は、

障がい種	人数
身体障がい	2,501 人
知的障がい	372 人
精神障がい	290 人
参考) 志摩市人口	51,872 人

身体障がい者のうち約 2.5 割、知的障がい者のうち約 7 割を占める。

近年、障がい者の社会参画が進められ、伊勢志摩管内では約 1 千人が職を得ている。しかし、知的・精神障がい者の就職は身体障がい者に比べて困難なのが実情である。

このため、知的・精神障がい者も対象となる就労機会の拡大が必要である。同時に、地域と障がい者の相互理解を進め、協力して助け合う仕組み作りも進める必要がある。

そこで、志摩社協は「福祉を通じた地域づくり」という理念の下、障がい者の現金収入 5 万円／月以上を目標に、就労機会の拡大に取り組んできた。

近年、障がい者の就労先として農業が注目され、「農福連携」が各地で取り組まれている。これは、農業には多様な作業があり、これを分割して単純作業化することで、個々の障がいに応じた作業を選択し易いためである。

志摩社協も平成 13 年より「花き」や「きんこいも（干し芋）」の生産等に取り組み、1 次産業における障がい者就労のノウハウを積み上げてきた（図 3）。



図 3. 志摩社協が農福連携で生産した花き類（中）と「きんこいも」（右）（志摩社協提供）

そんな中、志摩社協が地元で密着した新しい連携先として水産業での障がい者就労にも魅力を感じ始めた平成 25 年、県の水産分野でも「水福連携」の検討が始まり、連携して水福連携への挑戦が始まった。

5. 研究・実践活動の状況および成果

志摩社協は、県や漁業者等からの提案もあり、カキの掃除や漁具の整備、青ノリのゴミ取り等の請負作業に取り組んだ他、自営の鮮魚販売にも取り組んだ（図 4）。その結果、器用さが必要な作業では専用の道具を作って作業しやすくし、複雑な作業は分割して単純作業化することで、障がい者も様々な水産業務に従事出来ることが分かった。



図 4. 志摩社協の水福連携の取組例（左から養殖支柱の清掃、カキカゴ修繕、鮮魚販売）（志摩社協提供）

一方、漁業は季節によって仕事の内容と量が大きく異なることから、漁業者から委託される作業を請負うだけでは、収入の安定性や持続性を欠くことが分かった。このため、

障がい者が主体的に通年就労できる仕組みの構築も必要とされた。

そこで、志摩社協は農福連携で得たノウハウを生かしやすい養殖業、中でも地元で盛んなカキ養殖業に着目し、障がい者によるカキの養殖に挑戦することを決意した。しかし、志摩社協の漁業参入にあたっては、そもそも社会福祉協議会が漁業をできるのかなど、整理すべき様々な課題があり、早期の実現は困難とされた。

それでも「少しでも早く障がい者の収入につなげたい」との社協関係者の強い思いで弊社「合同会社志摩ふくし水産」は設立され、地元漁業との調整等を経てカキ養等を始めることができた。

(1) カキ養殖

平成 29 年 12 月現在で、筏 6.5 台を使用してマガキとイワガキを養殖している。

養殖に必要な施設や漁具等は、漁協の所有施設を借りたり、中古品を譲ってもらったりして揃えることができた。



図 5. 高圧洗浄機によるカキの洗浄



図 6. 作業筏でのカキ掃除

養殖にかかる作業では、弊社の指導員と、障害を持つ従事者とで協力して行っている。足場の悪い船や養殖筏での作業は危険を伴うため、安全対策としてカキの垂下量を半分に減らしたり、なるべく作業筏や陸上での作業に振り替えるなどの工夫をしている(図 5,6)。

馴れないカキの養殖であるが、地元の先輩漁業者から手取り足取りの指導を頂き、なんとか出荷にこぎ付けることができた。

水温が下がり、ぷりぷりのマガキの身が現れた時は、皆で「やった！」と喜び、早速焼きガキにして味見した(図 7)。



図 7. 出荷を控え、よく太ったマガキ

今年度は、夏にイワガキを約 17 万円分出荷し、今はマガキを出荷している最中で、総売上げは 60 万円程を見込んでいる。出荷先は鳥羽磯部漁協や志摩社協、個人である。

(2) 漁業に関する作業の請負

カキ養殖だけでは、カキの水揚げまで収入が無く、その間の工賃を従事した障がい者

者に払うことが出来ない。このため、的矢湾周辺地域のカキ養殖漁業者と契約し、カキ掃除と漁具整備を請け負うことで、定期的な収入を得ている。

カキ掃除では、指導員 2 名（うち 1 名は志摩社協職員）と障害を持つ従事者 3 名での体制を基本とし、請負先の施設に赴いて作業を行っている（図 8）。カキ掃除は春～秋を主とする季節的な作業であるが、掃除するカキが無い時には、垂下ロープの釘抜き（図 9）やカゴの修理等を請け負うことで、通年の契約を結ぶことができた。

最初はたどたどしかった作業にも徐々に慣れ、効率良く作業が出来るようになってきた。仕事ぶりは請負先からも評価頂いており、新しい作業の提案を頂いたり、他所にも仕事を紹介して頂けたことは、大きな励みになった。

なお、平成 29 年度の売上は 200 万円以上が見込まれている。



図 8. 請負先におけるカキ掃除作業の様子



図 9. カキ垂下ロープの釘抜き作業の様子

（3）就労の成果

弊社の活動地域の三ヶ所・的矢地区の方々からは、当初より多大な協力を頂いているが、事業開始後には福祉に対する理解がより深まったと感じている。

平成 29 年度は 9 名の障がい者が弊社の業務に従事し、12 月現在では 6 名が従事している。このうち 2 名は志摩社協の職員（障がい者雇用）で、指導員として参加している。従事者として働く 4 名の障がい者のうち、2 名は月に 8 万円、2 名は月に平均 4.2 万円を得ており、2 名が志摩社協の目標、「現金収入 5 万円／月以上」を達成した。

従事した障がい者の中には、就労を通して社会性や積極性が増したり、「自分にもできる仕事があった」と喜んでいた方もいた。

6. 波及効果

障がい者の就労を目的とした法人の漁業参入は全国的にも先例が無いこともあり、取材や視察を受けたり、福祉関係の研修会等で紹介されることも多い。

（1）取材対応

平成 29 年 3 月に共同通信による原稿・映像取材があり、NHK のニュースや、産経新聞、伊勢新聞などで取り上げられた。その反響として、愛媛県や島根県の TV 局、香川県等から、取組に対する問い合わせがあった。

(2) 視察・講演

視察として、平成 29 年 9 月には静岡県函南町身体障害者福祉会（30 名）が、12 月には伊賀市民生委員会（37 名）が訪れた。

また、平成 29 年 3 月に「農林水福連携研修会」（津）で、6 月には「水福連携にかかる現地研修会」（鳥羽）で、志摩社協が弊社との取組を活動事例として紹介した（図 10）。



図 10. 「水福連携にかかる現地研修会」での志摩社協による講演の様子

(3) 新たな連携への展開

志摩社協が運営する鮮魚店「ふくしの魚やさん」では、平成 29 年 11 月より、弊社産のマガキのインターネット通信販売が開始された（図 11）。また、作業請負先の漁業者のカキも「水福連携商品」として販売されている。多くの人に美味しい的矢湾のカキを楽しんでもらい、障がい者のチャレンジについて知って頂ければ嬉しい。

この他、弊社産のカキは、志摩社協が運営する飲食店での食材利用についても話が進んでいる。



図 11. 弊社生産のカキの販売広告
(志摩社協提供)

7. 今後の課題や計画と問題点

少ないながらもカキの生産に成功し、障がい者の生活改善につながる水産業への就労体制を構築することができた。まだまだ試行錯誤の状態ではあるが、今後も取組を継続・発展させるには、特に以下の 3 つの課題に取り組んでいく必要がある。

- ・ より多くの障がい者の生活改善に寄与するため、事業規模の拡大と、作業しやすい環境の整備に取り組む。
- ・ 漁業に長けた指導者の確保・育成が取組の要であるため、優れた漁業技術を持つ引退漁業者等に指導員として従事して頂ける仕組みを地域に作る。
- ・ カキ養殖の繁忙期に生じる人員不足に対応するため、カキの仕事が少ない時の業務の開発に取り組み、収入を確保することで、従事可能な障がい者を増やす。

最近、志摩社協による漁業組合加入のハードルとなっていた課題が解決し、志摩社協は自らの漁業組合加入に向けて手続きを進めている。これが果たされれば、弊社は事業を志摩社協に譲ることを計画している。

地域の漁業者と障がい者が助け合い、水産業で活躍する姿が「普通」になる日が、一日でも早く訪れるのを期待している。

弊社の取組がその端緒となれば幸甚である。